

講影社

日本現代文學
全集

35

上田敏
寺田寅彦集
木下杢太郎



日本現代文學全集・講談社版 35

上 田 敏
寺 田 寅 集
木 下 空 太 郎

日本現代文學全集

35

上田敏・寺田寅彦・木下杢太郎集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和41年4月10日 印刷

昭和41年4月19日 發行

定 價 500圓

© KODANSHA 1966

著 者

者

上田敏
寺田寅彦
木下杢太郎

發 行 者

野 間 省 一

印 刷 者

北 島 織 衛

發 行 所

株式會社講談社

東京都文京區音羽町3~19
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3 9 3 0

印刷製刷株式會社
寫版製本株式會社
製函株式會社
背皮株式會社
表紙クロス日本クロス工業株式會社
口繪用紙日本加工製紙株式會社
本文用紙本州製紙株式會社
函貼用紙安倍川工業株式會社
見返し用紙三菱製紙株式會社
扉用紙神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

上田 敏集 目次

卷頭寫眞
筆 蹟

海潮音……………七

海潮音拾遺……………三

うづまき……………四一

美術の翫賞……………八

文藝世運の連關……………七

外國文學の研究……………三

戦後の思想界……………七

作品解説……………寺田 透三二

上田敏入門……………長谷川 泉三六

年 譜……………三九五

参考文献……………四三

寺田寅彥集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

嵐……………一〇五

やもり物語……………一〇七

津田青楓君の畫と南畫の藝術的價值……………一二〇

蛙の鳴聲……………一二七

丸善と三越……………一二七

亮の追憶……………一二六

浮世繪の曲線……………一二三

鑢屑……………一二三

備忘録……………一二〇

子規の追憶……………一五三

映畫の世界像……………一五三

夏目漱石先生の追憶……………一五七

物質群として見た動物群……………一六三

蒸發皿……………一六四

徒然草の鑑賞……………一七〇

變つた話……………一七四

學位に就て……………一七九

西鶴と科學……………一八四

柏林大學……………一九一

自由畫稿……………一九五

連句……………三三

連句の心理と夢の心理……………三三

俳諧の本質的概論……………三四

俳句の精神……………三四

作品解説……………寺田 透三三

寺田寅彦入門……………長谷川 泉三六

年譜……………一〇一

参考文献……………四三

木下空太郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

食後の唄	二五
和泉屋染物店	二七
空地裏の殺人	二七
船室の夜	二九
えすばにや・ぼるつがる記抄	三八
リュウ・ド・セイヌ	三八
サン・セバスチヤン	三三
ハビエルの城	三三
マドリイ市	三六

トレド	三三
コルドバ	三四
セビイヤ	三五
日本に於ける吉利支丹の運動	三六
國字國語改良問題に對する管見	三六
森鷗外の文學	三六
日本醫學史に於ける古方家	三七
作品解説	寺田 透 三八
木下空太郎入門	長谷川 泉 三八
年 譜	四〇
參考文獻	四四

上
田
敏
集

あぶねのとしのいもとな
みぎらのとしのみづあやふ

海潮音

遙に此書を滿州なる森陽外氏に獻す

大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる

獅子舞歌

海潮音序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の高踏派とに處する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を繙するに多少の變格を取つたは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊る

きものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。

近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、エルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へて、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンスタンチオ、オオパネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荊棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば情なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にエルレエヌ、エルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に霸を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に

嫻はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徒りぬ、心せよ。日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の微候を呈しらすや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナのお伯が近代文明呪詛の聲として、其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、全く賛同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評壇に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徴派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫

も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしなから、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て賛意を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ばざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人或は見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば本書一五九頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を營みて、醜汚汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に壓されて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫

に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに憧るゝ哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心狀に至りては皆相似たり。二〇二頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛れ、齋らす所只幻惑の悲音のみ。孤り此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り來らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香の美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

譯述の法に就ては譯者自ら語るを好まず。只譯詩の覺悟に關して、ロセッティが伊太利古詩翻譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。されば「東行西行雲渺々。二月三日遅々」を「とどまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きさきさき、やよひ、ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱が二條の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に従ひたる所多し。

明治三十八年初秋

上田 敏

燕の歌

ガブリエレ・ダンヌンチオ

彌生やよひついたち、はつ燕、
海のあなたの静けき國の
便もてきぬ、うれしき文を。
春のはつ花、にほひを尋むる
あゝ、よろこびのつばくらめ。
黒と白との染分縋くは
春の心の舞姿。

彌生來にけり、如月きげつきは
風もろともに、けふ去りぬ。
栗風の毛衣かりふ脱ぎすてて、
綾子羽ぶたへ今様に、
春の川瀬をかちわたり、
しなだるゝ枝の森わけて、
舞ひつ、歌ひつ、足速の
戀慕の人ぞむれ遊ぶ。
岡に摘む花、萼くさぐさ、
草は香りぬ、君ゆゑに、
素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻の姿に通ひ、
わだつみの波は輝く阿古屋珠。
あれ、蔽陰かげかげの黒鵜くろう、
あれ、なか空に揚雲雀。

つれなき風は吹きすぎて、
舊巢へて飛び去りぬ。

あゝ、南國のぬれつばめ、
尾羽は矢羽根よ、鳴く音は弦を
「春」のひくおと、「春」の手の。

あゝ、よろこびの美鳥よ、
黒と白との水干に、
舞の足どり教へよと、

しばし招がむ、つばくらめ。
たぐひもあらぬ麗人の
インルダ姫の物語、

飾り畫けるこの殿に
しばしはあれよ、つばくらめ。

かづけの花環こゝにあり、
ひとやにはあらぬ花籠を
給ふあえかの姫君は、

フランチェスカの前ならで、
まことは「春」のめがみ大神。

聲 曲

われはきく、よもすがら、わが胸の上に、
君眠る時、

吾は聴く、夜の静寂に、滴の落つるを將、
落つるを。

常にかつ近み、かつ遠み、絶間なく落つる
をきく、

夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われひ

とりして。

眞 畫

ルコント・ドウ・リイル

「夏」の帝の「眞畫時」は、大野が原に廣
ごりて、

白銀色の布引に、青天くだし天降しぬ。
寂たるよもの光景かな。躍く虚空、風絶え
て、

炎のころも纏ひたる地の熟睡の靜心。
眼路渺茫として極無く、樹蔭も見えぬ大野
らや、

牧の畜の水かひ場、泉は滴れて音も無し。
野末遙けき森陰は、裾の界の線黒み、
不動の姿夢重く、寂寞として眠りたり。

唯熟したる麥の田は黄金海と連なりて、
かぎりも波の搖蕩に、眠るも鈍と嘲みがほ、
聖なる地の安らけき兒等の姿を見よやとて、
畏れ憚るけしき無く、日の觴を嚙み干しぬ。

また、邂逅に吐息なす心の熱の穗に出て、
囁聲のそこはかと、鬚長額の胸のうへ、
覺めたる波の搖動や、うねりも貴におほ
かに

起きてまた伏す行末は沙たち迷ふ雲のはて。

程遠からぬ青草の牧に伏したる白牛が、
肉置厚き喉袋、涎に濡らす哺げさ、
妙に氣高き眼差も、世の煩累に倦みしごと、
終に見果てぬ内心の夢の衢に迷ふらむ。

人よ、爾の心中を、喜怒哀樂に亂されて、
光明道の此原の眞畫を孤り過ぎゆかば、
這がれよ、こゝに萬物は、凡べて虚ぞ、日
は燬かむ。

ものみな、こゝに命無く、悦も無し、はた
憂無し。

されど涙や笑聲の惑を脱し、萬象の
流轉の相を忘れむと、心の渇いと切に、
現身の世を赦しえず、はた詛ひえぬ觀念の
眼放ちて、幽遠の大歡樂を念じなば、

來れ、此地の天日にこよなき法の言葉あり、
親み難き炎上の無間に沈め、なが思、
かくての後は、濁世の都をさして行くもよ
し、

物の七たび涅槃に浸りて澄みし心もて。

大饑餓

夢國なる滄溟、濤の巻曲の搖蕩に
夜天の星の影見えて、小島の群と輝きぬ。
紫摩黄金の良夜は、寂寞としてまた幽に、

奇しき畏の満ちわたる海と空との原の上。

無邊の天や無量海、底ひも知らぬ深淵は
憂愁の國、寂光土、また譬ふべし、炫耀郷。
墳塋にして、はた伽藍、赫灼として幽遠の
大荒原の縦横を、あら、萬眼の魚鱗や。

青空かくも莊嚴に、大水更に神寂びて、
大光明の遍照に、宏大無邊界中に、
うつらうつらの夢枕、煩惱界の諸苦患も、
こゝに通はぬその夢の限も知らず大いなる。

かゝりし程に、相膚の蓬起皮のしなやかに
飢にや狂ふ、おどろしき深海底のわたり魚
あふさきさの徘徊に、身の鬱憂を紛れむ
と、
南蠻鐵の腮をぞ、くわつとばかりに開いた
る。

素より無邊天空を仰ぐにはあらぬ魚の身の、
參の宿、みつ星や、三角星や天蜷宮、
無限に曳ける光芒のゆくてに思馳するなく、
北斗星前、横はる大熊星もなにかあらむ。

唯、ひとすちに、生肉を噛まむ、碎かむ、
割かばやと、

常の心は、朱に染み、血の氣に欲を湛へつ
つ、

影暗うして水重き潮の底の荒原を、

曇れる眼、きらめかし、悽慘として運々た
りや。

こゝ虚なる無聲境、浮べる物や、泳ぐもの、
生きたる物も、死したるも、此空漠の荒野
には、
音信も無し、影も無し。たゞ水先の小判鯨、
眞黒の鰐のひたうへに、沈々として眠るの
み。

行きね妖怪、なれが身も人間道に異ならず、
醜惡、獐猛、暴戾のたえて異なるふしも無
し。

心安かれ、鱗ざめよ、明日や食らはむ人間
を。
又さはいへど、汝が身も、明日や食はれむ、
人間に。

聖なる飢は正法の永くつゞける殺生業、
かけ深海も光明の天つみそらもけぢめなし。
それ人間も、鱗鯨も、殘害の徒も、餌食等
も、
見よ、死の神の前にして、二つながらに罪
ぞ無き。

象

沙漠は丹の色にして、波漫々たるわだつみ
の

音しづまりて、日に燉けて、熟睡の床に伏
す如く、

不動のうねり、大らかに、ゆくらゆくらに
傳らむ、
人住むあたり銅の雲たち籠むる眼路のすゑ。

命も音も絶えて無し。餌に飽きたる唐獅子
も、
百里の遠き洞窟の奥にや今は眠るらむ。
また岩清水、逝る長沙の央、青葉かげ、
豹も來て飲む椰子森は、麒麟が常の水かひ
場。

大日輪の走せ廻る氣重き虚空鞭うつて、
羽搔の音の聲高き一鳥遂に飛びも來ず、
たまたま見たり、蟒蛇の夢も熱きか圓寢し
て、
とぐるの綱を動せば、鱗の光まばゆきを。

一天霽れて、そが下に、かゝる炎の野はあ
れど、
物鬱として、寂寥のきはみを盡すをりしも
あれ、
皺だむ象の一群よ、太しき脚の練歩に、
うまれの里の野を捨て、大沙原を横に行
く。

地平のあたり、一團の褐色なして、列なめ
て、

みれば砂塵を蹴立てつゝ、路無き原を直道に、

ゆくてのさきの障礙を、もどかしてや、力足し、

踏躡してこむ勢に、遠の砂山崩れたり。

導にたてる年高のてだれの象の全身は「時」が噛みてし刻みてし、老樹の幹のごとひわれ

巨巖の如き大頭、脊骨の弓の太しきも、何の苦も無く自づから、滑らかにこそ動くなれ。

歩運むることもなく、急ぎもせずに、悠然と、

塵にまみれし群象をめあての國に導けば、沙の畦くろ、穴に穿ち、續いて歩むともがらは、

雲突く修驗山伏か、先達の蹈踏でゆく。

耳は扇とかざしたり、鼻は象牙に介みたり、半眼にして辿りゆくその胴腹の波だちに、息のほてりや、汗のほけ、烟となつて散亂し、

幾千萬の昆蟲が、うなりて集ふ餌食かな。

饑渴の攻や、貪婪の羽蟲の群もなにかあら

黒皺皮の満身の膚をこがす炎暑をや。

かの故里をかしまたち、ひとへに夢む、道遠き

眼路のあなたに生ひ茂げる無花果の森、象の邦。

また忍ぶかな、高山の奥より落つる長木に巨大の河馬の嘯きて、波濤たぎつる河の瀬を、

あるは月夜の清光に白みしからだ、うちのばし、

水かふ岸の葦蘆を踏み碎きてや、降りたつを。

かゝる勇猛沈勇の心をきめて、さすかたや、涯も知らぬ遠のすゑ、黒線とほくかすれゆ

けば、

大沙原は今さらに不動のけはひ、神寂びぬ。身動迂き旅人の雲のはたてに消ゆる時。

ルコント・ドゥ・リイルの出づるや、哲學に基ける厭世觀は佛蘭西の詩文に致死の棺衣を投げたり。前人の詩、多くは一時の感慨を洩し、單純なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、此詩人に至り、始めて、悲哀は一種の系統を樹て、藝術の莊嚴を帶ぶ。評家久しく彼を目前に高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬドゥ・ミュッセエ、ラマルティエヌの後にいで、始めて詩神の雲裳を捉みて、之に倣嚴なる詩法の高橋を加へたるが故也。彼常に「不感無覺」を以て稱せらる。世人輒もすれば、此語を誤解して

曰く、高踏一派の徒、甘じて感情を犠牲とす。これ既に藝術の第一義を没却したるものなり。或は恐る、終に述作無きに至らむを。あらず、

あらず、此暫々蓋用せらるゝ「不感無覺」の語義を藝文の上より解する時は、單に近世派の態度を示したるに過ぎざるなり。常に宇宙の深遠なる悲愁、神秘なる歡樂を覺ゆるものから、當代の愚かしき歌物語が、野卑陳套の曲を反復して、譬へば情痴の涙に重き百葉の輕舟、今、藝苑の河流を閉塞するを敬せざるのみ。尋常世態の瑣事、笑そよく高踏派の詩人を動かす。されど之を倫理の方面より觀むか、人生に對する此派の態度、これより學ばむとする教訓は此一言に現はる。曰く哀樂は感ず可く、歌ふ可し、而も人は斯多阿學徒の心を以て忍ばざる可からずと。かの額付、物思はしげに、長髪わざとらしき詩人等も、此語には辟易せしも多かり。されば此人は藝文に劃然たる一新機軸を出し、者にして同代の何人より、其詩、哲理に富み、譬喻の趣を加ふ。「カイン」「サタン」の詩二つながら人界の災殃を賦し、「イバティ」は古代衰亡の頽唐美、「シリル」は新しき信仰を歌へり。ユゴオが壯大なる史景を咏じて、臺閣の風ある雄健の筆を振ひ、史乘逸話の上に敘情詩めいたる豊麗を與へたること並びて、ルコント・ドゥ・リイルは、傳説に、史蹟に、内部の精神を求めぬ。かの傳奇の老大家は歴史の上に燦爛たる紫雲を曳き、この憂愁の達人は其實體を闡明す。

＊

讀者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪壯悲慘なる北歐思想、明暢清明なる希臘田野の夢、または銀光の靡々たること、其聖十字架を

思はしむる基督教法の冥想、特に印度大幻夢涅槃の妙説なりけり。

黒檀の森茂げき此世の涯の老國より來て、彼は長久の座を吾等の傍に占めつ、教へて曰く、「寂滅爲樂」。

幾度と無く繰返したる大智識の教話によりて、悲哀は分類結晶して、頗る靜寧の姿を得たるも、なほ、をりふしは憤怒の激發に迅雷の轟然たるを聞く。是に於てか電火ひらめき、萬雷はためき、人類に對する痛罵、宛も藥綫の爆發する如く、所謂「不感無覺」の塙壁を破り了ぬ。

自家の理論を詩文に發表して、シオン・ハウエルの辨證したる佛法の教理を開陳したるは、此詩人の特色ならむ。儕輩の詩人皆多少憂愁の思想を具へたれど、厭世觀の理義彼に於ける如く整然たるは罕なり。衆人徒に虛無を讚す、彼は明かに其實なるを示せり。其詩は智の詩なり。而も詩趣饒かにして、坐ろにペラスゴイ、キュクロプスの城址を忍ばしむる堅牢の石壁は、かの纖弱の律に歌はれ、往々俗語に傾ける當代傳奇の宮殿を摧かむとすなり。

エミール・ゾラハアレン

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

珊瑚礁

波の底にも照る日影、神寂びにたる曙の照しの光、亞比西尼亞、珊瑚の森にはの紅

く、ぬれにぞぬれし深海の谷限の奥に透入れば、輝きにはふ蟲のから、命にみつる珠の華。

沃度に、鹽に、さ丹づらふ海の寶のまろもろは

濡髪長き海藻や、珊瑚、海膽、苔までも、臍脂紫あかあかと、華奢のきはみの繪模様に、

薄色ねびしみどり石、蝕む底ぞ被ひたる。

鱗の光のきらめきに白珊瑚を曇らせて、

枝より枝を横ざまに、何を尋ぬる一大魚、光透入る水かげに慵げなりや、もとほりぬ。

忽ち紅火飄へる思の色の鰭ふるひ、

藍を湛へし靜寂の、かげほのぐらき青海波、水揺りうごく搖曳は、黄金、眞珠、青玉の色。

床

さゝらがた錦を張るも、荒妙の白布敷くも、悲しさは墳塋のごと、樂しさは巢の如しと

も、人生れ、人いの眠り、つま戀ふる、凡べて

こゝなり、をさな兒も、老も若も、さをとめも、妻も、

夫も。

葬事、まぐはひほがひ、烏羽玉の黒十字架

に、淨き水はふり散らすも、祝福の枝をかざす

も、皆こゝに物は始まり、皆こゝに事は終らむ、

産屋洩る初日影より、臨終の燭の火までも、

天難る鄙の伏屋も、百敷の大宮内も、紫摩金の榮を盡して、紅に朱に矜り飾るも、

鈍色の櫓のつくりや、楓の木、杉の床にも。

獨り、かの畏も悔も無く眠る人こそ善けれ、

みおやらの生れし床に、みおやらの失にし

出征

物古りし親のゆづりの大床に足を延ばして。

高山の鳥栖巢だちし兄鷹のごと、身こそたゆまね、憂愁に思は倦じ、

モゲルがた、パロスの港、船出して、雄詰ぶ夢ぞ逞ましき、あはれ、丈夫。

チパンゴに在りと傳ふる嶺山の紫摩黄金やわが物と遠く求むる

船の帆も撓わりにけりな、時津風、西の世界の不思議なる遠荒磯に。

ゆふべゆふべは壯大の旦を夢み、
しらぬ火や、熱帯海のかちまくら、
こがね幻通ふらむ。またある時は

白妙の帆船の舳さき、たゞずみて、
振放みれば、雲の果、見知らぬ空や、
蒼海の底よりのぼる、けふも新星。

シュリ・ブリュドン

夢

夢のうちに、農人曰く、なが糧をみづから
作れ、

けふよりは、なを養はじ、土を墾り種を蒔
けよと。

機織はわれに語りぬ。なが衣をみづから織
れと。
石造われに語りぬ、いざ鎌をみづから執れ
と。

かくて孤り人間の群やはれて解くに由な
き

この咒詛、身にひき纏ふ苦しさに、みそら
仰ぎて、いと深き憐愍垂れさせ給へよと、禱りをろ
がむ
眼前、ゆくての途のたどなかを獅子はふた
ぎぬ。

ほのぼのとあけゆく光、疑ひて眠ひらけば、
雄々しかる田つくり男、梯立に口笛鳴らし、
船具の踢木もとどろ、小山田に種ぞ蒔きた
る。

世の幸を今はた識りぬ、人の住むこの現世
に、
誰かまた思ひあがりて、同胞を凌ぎえせむ
や。

其日より吾はなべての世の人を愛しそめけ
り。

シャルル・ボドレエル

信天翁

波路遙けき徒然の慰草と船人は、
八重の潮路の海鳥の沖の太夫を生擒りぬ、
楫の枕のよき友よ心閑けき飛鳥かな、
奥津潮騒すべりゆく舷近くむれ集ふ。

たゞ甲板に据ゑぬればげにや笑止の極なる。
この青雲の帝王も、足どりふらゝ、拙くも、
あはれ、眞白き双翼は、たゞ徒らに廣がり
て、
今は身の仇、益も無き二つの權と曳きぬら
む。

天飛ぶ鳥も、降りては、やつれ醜き瘡姿
昨日の羽根のたかぶりも、今はた鈍に痛は
しく、
煙管に嘴をつゝかれて、心無には嘲けられ、
しどろの足を摸ねされて、飛行の空に懂が
る。

雲居の君のこのさまよ、世の歌人に似たら
ずや、
暴風雨を笑ひ、風凌ぎ獵男の弓をあざみし
も、
地の下界にやはられて、勢子の叫に煩へば、
太しき双の羽根さへも起居妨ぐ足まとひ。

薄暮の曲

時こそ今は水枝さす、こぬれに花の顫ふこ
ろ、

花は薫じて追風に、不斷の香の爐に似たり。
匂も音も夕空に、とうとうたたり、とうた
り、

ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈
よ、

花は薫じて追風に、不斷の香の爐に似たり。
痾に悩める胸もどき、ギオロン樂の清掻や、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈
よ、
神輿の臺をさながらの雲悲みて艶だちぬ。

瘼に悩める胸もどき、ギオロン樂の清振や、
闇の涅槃に、痛ましく悩まされたる優心。
神輿の臺をさながらの雲悲みて艶だちぬ、
日や落入りて溺るゝは、凝るゆふべの血潮
雲。

闇の涅槃に、痛ましく悩まされたる優心、
光の過去のととかたを尋めて集むる憐れさ
よ。

日や落入りて溺るゝは、凝るゆふべの血潮
雲、
君が名残のたゞ在るは、ひかり輝く聖體盒。

破鐘

悲しくもまたあはれなり、冬の夜の地爐の
下に、
燃えあがり、燃え盡きにたる柴の火に耳傾
けて、
夜霧だつ闇夜の空の鐘、きゝつゝあれ
ば、
過ぎし日のそこはかとなき物思ひやをら浮
びぬ。

喉太の古鐘きけば、その身こそうらやまし
けれ、
老らくの齡にもめげず、健やかに、忠なる
聲の、

何時もいつも、梵音妙に深くして、穩どか
なるは、
陣營の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ。鬱憂のすさびごゝ

ち、

寒空の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそ

ふとも、

覺束な、音にこそたてれ、弱聲の細音も哀
れ、

哀れなる臨終の聲は、血の波の湖の岸、
小山なす屍の下に、身動もえならで死する、

棄てられし負傷の兵の息絶ゆる終の呻吟か。

人と海

こゝろ自由なる人間は、とはに賞づらむ大
海を。

海こそ人の鏡なれ。灘の大波はてしなく、

水や天なるゆらゆらは、うつし心の姿にて、

底ひも知らぬ深海の潮の苦味も世といづれ。

さればぞ人は身を映す鏡の胸に飛び入りて、

眼に抱き腕にいだき、またある時は村肝の

心もともに、はためきて、潮騒高く湧くな

らむ、

寄せてはかへす波の音の、物狂ほしき歎息

に。

海も爾もひとしなみ、不思議をつゝむ陰な
りや。

人よ、爾が心中の深淵探りしものやある。

海よ、爾が水底の富を数へしものやある。

かくも妬げに祕事のさはにもあるか、海と
人。

かくて劫初の前より、かくて無數の歲月を、

慈悲悔恨の弛無く、修羅の戦、酣に、

げにも非命と殺戮と、なじかは、さまで好

もしき、

噫、永遠のすまうどよ、噫、怨念のはらか

らよ。

梟

黒葉木松の木下闇に

並んでとまる梟は

昔の神をいきうつし、

赤眼むきだし思案顔。

體も崩さず、ちつとして、

なにを思ひに暮がたの

傾く日脚推しこかす

大凶時となりけり。

鳥のふりみて達人は

道の悟や開くらむ、